

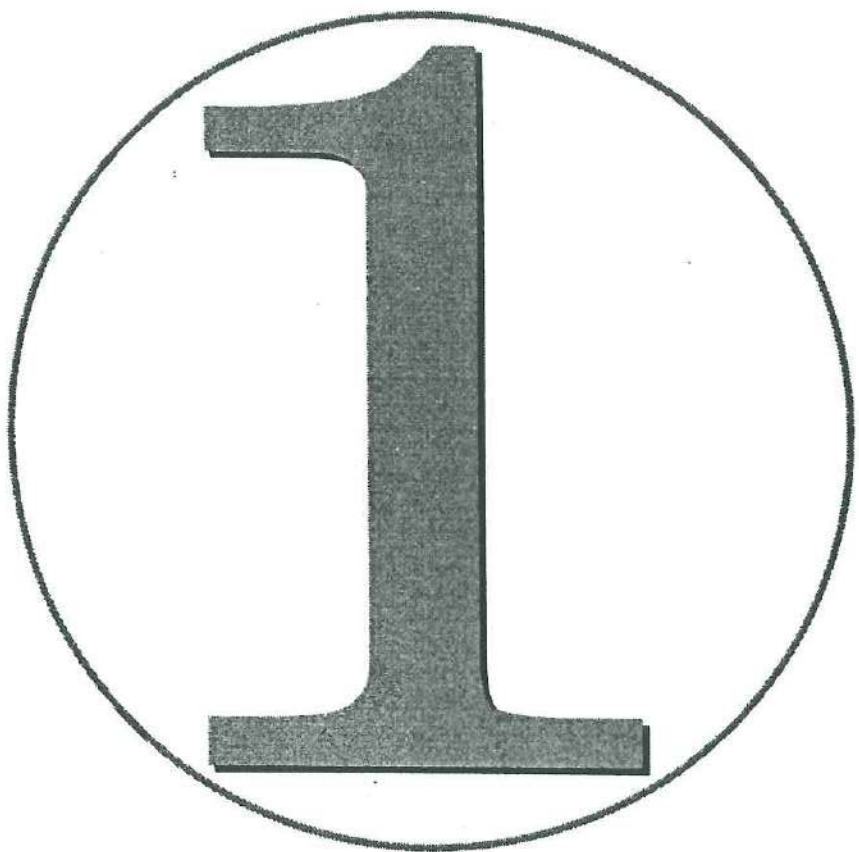
国語

時間 60 分

「注意」

- 1、放送で指示があるまで、この冊子さつしを開いてはいけません。
- 2、この冊子は20ページまであります。ページが足りなかったり、順序がおかしかったり、また印刷が不鮮明ふせんめいで読めない部分があったりした場合には、手をあげて監督かんとくの先生に申し出なさい。
- 3、問題についての質問は一切受け付けません。いっさい
- 4、下書きにはこの冊子の下書き欄らんや余白を使いなさい。
- 5、字数指定のある問題では、句読点やカッコなども字数ふくに含みます。

聖光学院中学校



一、例にならって、次の①～⑤の文の——線部の言葉をそれぞれ漢字に直しなさい。ただし、それぞれの文の□には、「」内の字を部首に持つ漢字が入るものとします。

例

雨が降った後は

□

メンがすべりやすくなっている。[足] ↓ 路

〈答〉路面

① 友達の忠告で、今までの言動をハン□した。[目]

② 海外へ出て、ケン□を広めることにした。[耳]

③ 悪天候によって、野菜の値段が高値で□イしている。[手]

④ 午後から出かけたので、ショウ□二時間しか遊べなかった。[口]

⑤ □ゴに何かの気配を感じて振り向いたが、そこには誰もいなかった。[肉]

二、次の①～⑤の言葉の には、それぞれ数字が入ります。例にならって、 にあてはまる数字の合計を、算用数字で答えなさい。

例	
人のうわさも 日。 ↓ 七十五	
石 鳥。 ↓ 一・二	
	75
	+
	1
	+
	2
	78
	答
	78

① 寸の虫にも 分の魂。
早起きは 文の徳。

② を聞いて を知る。
瓜 つ。

③ 寒 温。
石の上にも 年。

④ 仏の顔も 度まで。
口 丁手 丁。

⑤ 把 からげ。
夏も近づく 夜。

三、次の文章は、バイクに乗って旅に出た七十四歳さいの山野イコやまのが、母親の故郷で、ふーちゃんという、十二歳さいぐらいの少女の姿をした幽霊ゆうれいに出会った時の話です。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

ゆうれいって、柳やなぎの下あたりに、陰気いんきにさまよっているものじゃないの？

「ゆうれいは、うらめしや〜って叫さけんで、出てくるってきいたけど」

私わたしはよく絵にあるように、両手をだらんとさせ、振ふつてみせた。

「かつこわるー！」

ふーちゃんは今どきの女の子みたいに生意気につぶやいた。

「でも、やつぱりふしぎ。イコちゃんにあたしが見えたなんてさ。うれしいけど、どうしてだろうね。

あつ、もしかしたらあの赤いバイクのせいじゃない？ あれ、どこか、昆虫こんちゅうににてるもん。昆虫はね、生きる時間が短いから、心残りのかたまりでしょ。だから元気なうちはやたら走り回りたいんじゃないの。あせってるんだ」

それって私のこと言ってるみたいだ。

「すごいなあ、走るのって、気持ちいいだろうなあ。ブアンブアンブアーンって、速いのだーいすき」

ふーちゃんはほつたをふくらませて、音を出してる。目が輝かがやいて興奮してる。①へんなゆうれい。

「ところでふーちゃんの心残りって、いったいなんなんだろうねえ」

私はしらばっくれて、またしても聞かずにはられない。

「ずっとかんがえてはいるんだけど……それが、ぼーんやりとしてるのよ。でもね、ここ、胸の中にあたしの心残り、確かにぶらさがってる。重たいのよ。あきらめればいいんだけど、それができないのよ。早くかるくなりたいよ。でもどうしたらいいんだろう。あたし、十二だから……おかあちゃんやおとうちゃんの、ことばぐらいしか、記憶きおくにないのよ。思い出がないって言うのは、力がないってことだわねえ。おかあちゃんのことば、とってもなつかしいけど、これは心残りとはちがうような気がするの。心残りって、もっとちゃんとしたことだと思う。あたしって、ほんとにしょうがないやつ……」

ふーちゃんは大きな溜息ためいきをついた。

「あたしね、窓からぼーっと外ばかり見てるって、おかあちゃんにいつも文句言われてた。でもぼーっとしてたんじゃないのよ。どこかに行きたいと思ってたの。だって川は毎日、毎日、止まらないで流れていくんだもの。あんなふうにごこか遠い所に行ってみたかった。冒険ぼうけんしてみたかった。これが心残りなのかなあ……そうだとしたら自分のことじゃない？ ずいぶんわがままな心残りだね」

② ふーちゃんは探る^{さぐ}ように、手で自分の胸のあたりをなぞっている。言いかたがなんともあいまいい。でも、「どこかに行ってみたかった」という言葉はずんと私の胸にも響^{ひび}いてきた。きつとどこにも行かれなかったんだ、でも、死んだ時は、この地を離^{はな}れて東京にいたはず。私はそこで生まれているのだから。

ふーちゃんは目を引っくりかえるように上にむけて、なにかを考えている様子をしながら、続けて言った。

「あたし、東京に行くはずだったの。＊1 高等小学校卒業したらね。あれ、もしかしたら、行ったのかもしれない。だって、本郷^{ほんこう}って町の名前おぼえているのよ。それって東京の町でしょ。そこに坂があった……。知り合いのおねえちゃんがお嫁^{よめ}に行った家に、いさせてもらったのかなあ……。そこから学校に行くはずだったの。やっぱり……。行ったのかなあ……。その学校ね、絵の学校。あたし、絵描^{えか}きになりたかったの。ううん、なるはずだったのよ……。どうしてこんなこと急におもいだしたんだろう」

私はさつき見た、壁^{かべ}に貼^はってあった子どもの絵を思い出した。すすによごれて、かろうじて女の子が描^かかれているのが見えたけど。

「ああ、わかった。下の壁に貼^はってあった絵、ふーちゃんが小さい時、描^かいたのね」

「どれ？」

「カレンダーのところの」

私は廊下^{ろうか}のむこうに首を向けた。

「あれ、あれは、ちがう。あんな下手じゃなかった」

ふーちゃんは鼻にしわを寄せ、自信ありげにふんと小さく息をつく。

「じゃ、ふーちゃんの絵はどこにあるの？」

「もう、ないと思う。どこにもないと思う。そんな気がする」

ふーちゃんは、何にもないっていうように両手をひろげてみせる。

私はふーちゃんの細い腕^{うで}をつかんで、「しっかり思い出しなさいよ！」とゆすりたくなった。

私にしてみれば、ここで、「実は、残してきた娘^{むすめ}たちが心残りで、成仏^{じやうぶつ}できなかつたのよ」とドラマチックに打ち明けてもらいたかった。「うらめしや〜」と形だけでも、未練たらたらに。じぶじぶーっと涙^{なみだ}ぐらい見せて欲^ほしかった。それが、まあ、＊2 コオロギの兵隊と言ってみたり、赤いバイクにはしゃいでみたりして。あいにくお天気まで晴天、夏の初めのきれいな空色をしている。なんだか訳もなく私は不満になっていた。

目をあげると、ふーちゃんは、首をまげて、笑ってる。その ^A頓着ない顔を見て、はっと気がついた。もしかすると、ゆうれいって、出会った人の記憶にある姿で現れるのではないか……。私には ^{*3}写真のなかの十二歳のハハオヤの記憶しかないから、こういうことになってしまったのかもしれない。とすると、言い換えれば、ここにいるのは十二歳までの記憶しかないふーちゃんなのだ。まだ自分のむすめ、つまり私と出会うはるか前のふーちゃんということになる。

私は一步乗り出した。あの写真を見ればすべて解決する。

でも ^③私は動きを止め、ふーちゃんを見るだけにした。もしそんなことをしたら、とたんにすべてが終わってしまいそうな気がする。心残りの元がこんなおばあさんまで生きて、おまけにまだおてんばやってるなんて知ったら、安心して、さっさとむこうの世界に行ってしまうかもしれない。そこで総て ^{すべ}終わりだ。私はもう少しこの可愛い ^{かわい}女の子のそばにくっついていたかった。

「ねえ、中庭の松にのぼらない？」

ふーちゃんは階段を足早に降りて、私の手を引くと、ガラス戸を抜けていく。庭に出ると、すぐ枝に飛びつき、片足をかけると、もう一段上の枝に腰をのせた。

「ねえ、イコちゃん、できる？ 下の枝ならこわくないよ」

私は、小学生の時の鉄棒を思い出しながら、飛びついて、枝に腰掛けた。

「うまい、うまい」

それを見て、ふーちゃんは手を叩いている。

「ふーちゃん、いつもこの木に登ってたの？」

「うん、ここに逃げてた」

「にげてた？」

「だってお手伝いきらいだもん。お客さんに晩ご飯を運ぶのいやなの。でも、見つかったら大変。枝がおれたらどうすんだあ。松の木は宿屋の命だって……。おかあちゃんが怒鳴るの。家はおとうちゃんよ、おかあちゃんの方が強かったからね。おとうちゃんは鉄道を造りに、この町に来てただけど、できあがった後は、おかあちゃんと宿屋の仕事してたの。それがさ、とんでもない『夢見る夢男さん』でね、東京へ行って新しいもの見てくると、すぐそわそわして、お店をやりたいくなるのよ。*1アイスクリーム屋をやるうかとか、それで船のお客さんに売ろうかとか。船のお客さんはそんなのほしくないのよ。それよりなんといってもお酒なの。おかあちゃんも本当は新しいもの好きだったのかもしれないね。こんなおとうちゃんが好きになったんだから」

顔の上で、ふーちゃんの足がぶらぶら揺れてる。

「ふうら うーとー えーんや どうど ふーとーとーどどえーんやー」

見ると、ふーちゃんが顔を上にむけて、ご機嫌に鼻歌を歌ってる。中庭の四角い空は薄いもも色に変わって、夕方が近づいてるようだった。

「その歌、なあに？」

「船頭さん達の船引き歌。船頭さん達は綱で船をひっぱって、むこう岸をのぼってくるのよ。下るときは船は川の流れて走るからいいんだけどね。この歌はのぼるときに歌うの。川下のほうから少しずつ聞こえてくると、だれかがあたしをつかまえに来るんじゃないかって、こわくて、泣いてた。遠い昔の話」

「ふーちゃんのいくつ頃の話？」

「十二ぐらいかな、いや、もっと小さい時かな……」

ふーちゃんはBこともなげに言った。遠い昔の話、十二歳ぐらいの時のことを、十二歳のふーちゃんと言っている。この十二歳の時の記憶と、今、目の前にいる十二歳の記憶のはじっこを持って無理やり広げたら、その間にかくれてしまった物語が姿を現すかもしれない。私が欲しい思い出と、ふーちゃんが知りたい思い出が。

昔、吉井川の上流で採掘された鉱石を、船で下流の町まで運んでいた。やがて川に沿って鉄道が出来ると、鉱石の輸送はそれに代わり、その鉄道も鉱山の閉鎖とともに廃線になった。そんな成り行きの中で、ふーちゃんの船宿も立ちゆかなくなっていく。この鉄道の敷設に三重の松坂から技師としてやってきたのが、ふーちゃんの父親だった。工事の間この船宿に滞在し、宿の娘とラララ〜と恋に落ち、ふーちゃんがこの世に現れたということになる。そして私も現れたことになる。このあたりのことは八十二歳まで生きたふーちゃんの妹、私の叔母が話してくれた。この叔母とも、戦災で離ればなれになり、ひよんなことから再会し、死の前年に一度会っただけだった。

「うちの宿屋商売はね、おとうちゃんがつくった鉄道のためにつぶれたようなものよ。④皮肉って言えば、皮肉。うちの女たちは、代々美形でねえ。おとうちゃん、そこにまいったのね。そのかわりみんな早死に。わたしだけが、じゃがいも顔で、それで長生きできたのかもね」

その時、叔母は苦笑いしながら、ちらっと悔しそうに口をまげた。

「もうそんな舟歌ぐらいで泣かないよ。あたし、ゆうれいだもん」

ふーちゃんはおごをつんとしゃくつてみせた。たいした自覚のないゆうれいが、ゆうれいなのを威

張^はっている。

「だけどさあ、どうしてイコちゃんにはあたしが見えたんだろう。あたし、うれしいじゃなくなっちゃったのかなあ」

ふーちゃんは手を夕焼け空にかざして見ている。

「私にも、ふーちゃんはうれしいのような気がしないわ」

「えー、まさかあ。でも、そういうことにしようか……なんか、嬉しい」

ふーちゃんはあくまでものんきだ。お幸せな性格してる。十二歳の時の私とは違う。死がこわくてたまらなかった。なぜ人は死んでしまうのだろう。しかもよりにもよって、自分の母親が死ぬなんて……と理^り不^ふ尽^{じん}に思えた。それをこの歳^{とし}になるまで、引きずって消えることはなかった。

でもふーちゃんはなんにもわかっていないのだ。こんな田舎^{いなか}の町から、東京のど真^まん中の深川^{ふかがわ}生まれの人といっしょになって、二人の子を産んで、三十歳で死んでしまったことなんて。

「うれしいになるまえのことは、憶^{おぼ}えてないの、ぜんぜん？」

「うー、ない。でもちいさいときは憶^{おぼ}えているよ。ほら舟歌、うたえたでしょ。友達の和^{かず}ちゃんのこと、勇^{いさむ}のことも憶^{おぼ}えているよ。でも二人ともイコちゃんみたいに遊びに来てくれない。うれしいだから気味悪いのかな。もう死んだのかもしれない。ちゃんと」

⑤ ふーちゃんは「ちゃんと」という言葉を、ゆつくりと、溜息のように言った。

ふーちゃんに私が見え、私にふーちゃんが見えるのは、どう考えてもあの写真のせいなのは間違^{まちが}いない。もし残^{のこ}っていたのが、私を抱^だいた母の写真だったら、おかあさんになってるふーちゃんに会えたかもしれない。

「そろそろ、おいとましないと……」

私は口の中でもぞもぞと言った。日は暮れかけてる。まさかこのだれの所有ともわからない家に泊^とまるわけにもいかない。私はうれしいじゃないんだから。

「また、来るわ。会えるといいね」

私の言葉を聞きつけて、ふーちゃんは眉^{まゆ}をひそめた。目が寄って三角になっている。と、口からはじけるように言葉が飛び出した。

「やだ、行^いっちゃ、やだ」

口がゆがんで泣き出しそうだ。体がふるえている。

私のなかで、ぞつくとうれしさが走^{はし}った。

「じゃ、いつしよに行こうか」

思わずこう答えていた。

「うん」

ちいさい頭がこつくと揺れた。

「あの赤いバイクにのつていくんでしょ！」

ふーちゃんは大急ぎで木から飛び降り、うれしそうに言う。E 拍子抜けするぐらいあっさり気分が
変わってる。

「この家からはなれてもいいの？」

「いいわよ。ゆうれいはひとりじゃあまり遠くには行けないんだけど、でも乗りものがあるんでしょ。
なら大丈夫」

なんだかとても都合のいい仕組みになっているみたい。

「うん、わかった！」

私はふーちゃんの手を引っ張ると、そのまま、家を抜け出した。この子と少しでも長くいられば、
それだけでいい。私はもうそのことしか考えられなかった。

それにしても私の母、ふーちゃんはいかにもあいらしい。姿、形もかわいらしい。

この私にもいろいろ恋はあったけど、仕事に夢中になっていて、いままで結婚にも、子供にも恵まれ
なかった。自分で選んだ道とはいえ、これはやっぱり心残り。でも、でもよ、この子を娘と思っちゃえ
ば、なんの問題もないじゃないの。そうよ、⑥ラストランの道連れには、これ以上のぞめないくらい
素敵な相手。見えないから、かわいい娘でしょって、人に見せびらかせないのは、まことに残念だけど。
「さ、後ろに乗って、私の腰に手を回して、しっかりつかんでいるのよ」

私は大急ぎで空気のように軽いふーちゃんを抱いて、シートの後ろに乗せた。それからヘルメットを
かぶり、バイクのエンジンをかけて、急発進した。後ろで、「ぎゃぶ」っていうふーちゃんのおどろい
た声がする。

バイクは土手の道をにげるように走り出した。

(角野栄子『ラストラン』による)

※問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた。

(注)

- *1 高等小学校……第二次世界大戦のころまで存在していた、現代の中学校に近い性格の学校。
- *2 コオロギの兵隊……イコのバイク用の服装を、ふーちゃんが言い表した言葉。
- *3 写真……イコが母親の生家で見つけた、十二歳の時の母親の写真。
- *4 アイスクリン……アイスクリームの昔の呼び方。
- *5 ふーちゃんの船宿……ふーちゃんの家族が経営していた、吉井川の鉱石運搬船の船員を泊めるための宿屋。

問一

——線部A「頓着ない」、B「こともなげに」、C「ひよんなこと」、D「眉をひそめた」、E「拍子抜け」について、これらの言葉を本文中と同じ意味で使っている文として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A「頓着ない」

ア 彼は学校中でも頓着ないお調子者である。

イ 頓着なければ、予定通り運動会を実施する。

ウ 弟の将棋の腕前は中学生とくらべても頓着ない。

エ 厳しい状況だったが、頓着なく引き受けてくれた。

オ ケーキが何種類もあったが、一瞬の頓着なくエクレアを選んだ。

B「こともなげに」

ア 電車は海岸をしばらく走った後、こともなげにトンネルに入った。

イ 先生は額にしわを寄せて、こともなげに考えこんだ。

ウ 鋭いシュートだったが、キーパーはこともなげに受け止めた。

エ 老人は涙を流しながら、昔のことをこともなげに語った。

オ 難しい問題だが、こともなげに解決しよう。

C 「ひよんなこと」

ア 君がひよんなことを成し遂げられるとは思ってもみなかった。
イ 兄はひよんなことに熱中するあまり、体調を崩してしまった。
ウ いきなり難しいことをやるのではなく、まずはひよんなことから始めよう。
エ ひよんなことばかりしていないで、しっかり勉強しなさい。
オ 彼とは、ひよんなことで知り合い、何でも話せる間柄になった。

D 「眉をひそめた」

ア 一番奥のコートで練習している息子の顔を見ようと眉をひそめた。
イ 手品が始まったので、タネを見抜いてやろうと眉をひそめた。
ウ 説得のかいあって認めてもらえたので思わず眉をひそめた。
エ よい話に思えたが、だまされまいと必死に眉をひそめた。
オ 公園にごみが散らかっているのを見て眉をひそめた。

E 「拍子抜け」

ア 生徒会長としての初仕事は拍子抜けで、身の引きしまる思いがした。
イ 試合を前に緊張していたが、雨で中止と聞いて拍子抜けした。
ウ 彼が歌うと音程が合わず、拍子抜けしている。
エ 子供に対する彼の拍子抜けした優しさは見習うべきだ。
オ 雷が間近に落ちて、拍子抜けしそうなくらい驚いた。

問二——線部①に「へんなゆうれい」とありますが、イコはふーちゃんのどういうところが幽霊とゆうれい

して「へん」だと感じたのですか。十五字以上二十字以内で説明しなさい。

【下書き欄】—— 必要ならば使いなさい。

問三 ——— 線部②に「ふーちゃんは探るさぐるように、手で自分の胸のあたりをなぞっている」とありますが、この時のふーちゃんの心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　ゆうれいである自分がこの世から離はなれられないのは、母親にもう一度会いたいとか、遠くへ行きたいとかいった自分本位の願いのせいだと気づき、情けなく思っている。

イ ゆうれいとしてこの世にとどまることになった自分ならば、現実の束縛にとらわれることなく、どこまでも冒険しにいくことができる、期待に胸をふくらませている。

ウ　　ゆうれいである自分が何らかの心残りがあつてこの世にとどまつてしまったことはぼんやりと理解しているが、それが何なのか納得のいく答えを得られず、じれったく思っている。

工　　ゆうれいとなつた自分がこの世から離れられないのは、生きていたころにいつも窓から外ばかり見ては母親にしかられているような子だつたからだ、と、恥はずかしく思っている。

オ　　ゆうれいとなつた自分がこの世にとどまつているのは、何か理由があつてのことだろうと思ひ
何としてもそれを解明してやろうと、決意をあらたにしている。

問四

——線部③に「私は動きを止め、ふーちゃんを見るだけにした」とありますが、どうしてこのようにしたのですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 十二歳さいのふーちゃんともつと遊びたいのに、自分の正体を明かしてふーちゃんの心残りのもとがこんなおてんばなおばあさんだとわかったら、ふーちゃんはあきれて私の前からいなくなってしまうのではないかと恐おそれたから。

イ ゆうれいは出会う人の記憶きおくの中に残った姿でしか現れないのだということがわかり、ずっと疑問に思っていた、ふーちゃんがどうして十二歳の姿のままで現れたのかということの答えが出たと思われたから。

ウ ゆうれいのふーちゃんに写真を見せたら、ふーちゃんは写真を撮とった時のことを思い出して嬉うれしくなり、この世に残した心残りのことなどすっかり忘れて、成仏じょうぶつしてしまうのではないかと思ったから。

エ くつたくの笑顔えんごを浮かべている十二歳のふーちゃんを見ているうちに、心残りのもとを解決して真実を明らかにすることより、このまま一緒いっしょの時間を過ごしていいたいと思うようになってきたから。

オ 無心に遊んでいるふーちゃんを見ると、不満よりも愛おしさの方が大きくなってきて、写真を見せて昔のことを思い出させ、ふーちゃんに涙を流させてしまうのはかわいそうだと感じるようになったから。

問五 —— 線部④に「皮肉って言えば、皮肉」とありますが、どういう点が皮肉なのですか。その説

明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ふーちゃんの父親たちがつくり、船に取って代わって鉱石の輸送手段となったはずの鉄道も、
鉱山が閉鎖されると廃線になってしまった点。

イ ふーちゃんの母親と結婚した相手が関わっていた鉄道の開通によって、船が鉱石輸送の手段と
しての座を奪われ、ふーちゃんの船宿の経営がうまくいかなかった点。

ウ ふーちゃんの母親が、物事の現実を見ようとしないうーちゃんの父親と結婚したおかげで船宿
の経営が危うくなり、やがて鉱山も閉鎖に追いこまれた点。

エ ふーちゃんの母親の一族は美人ぞろいであつたが、ふーちゃんの妹だけはそうではなく、その
おかげで八十二歳まで長生きすることができた点。

オ ふーちゃんの父親は最初、鉄道を敷設することで船宿を立ちゆかなくするために送りこまれた
のに、よりによって船宿の娘と恋に落ちて結婚してしまった点。

問六 —— 線部⑤に「ふーちゃんは『ちゃんと』という言葉で、ゆつくりと、溜息のように言った」

とありますが、この時のふーちゃん的心情について説明した文として最もふさわしいものを、次の
ア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 先に成仏していった友達のことがうらやましく、自分も早く心残りを解決し、気味の悪いゆう
れいではなくなつてこの世を去りたいとあせりを感じている。

イ 早く帰ろうと考えているイコを少しでもその場にとどめるため、謎めいたしゃべり方をするこ
とでイコの気を引こうと躍起になっている。

ウ イコと親しく思い出を語り合えるのも、イコがここにいるわずかな時間だけだということがわ
かり、その終わりが遠くないことを知って憂鬱になっている。

エ 友達だった和ちゃんや勇が遊びに来てくれないのは、ゆうれいになってしまった自分のこと
を気味が悪いと思つているからかもしれないと思い、悲しくなっている。

オ 心残りを解決することができずに、ゆうれいという中途半端な形でこの世にとどまつてし
まつている自分に対して、やりきれなさを感じている。

問七 ――線部⑥に「ラストラン」とありますが、これはどのようなものですか。文章全体を読ん

で、その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 幼いころに顔も知らないまま母と死に別れたことや、仕事のおかげで家庭も持たずに年老いてしまったことなど、まだ心に残っているわだかまりを晴らしていくための、人生最後になるかもしれないバイクの旅。

イ 自分の人生と一緒に走り続けてくれた愛車に対する感謝の念から、むなしかった人生の中でつくらい意味のあることをしようと思ひ、赤いバイクと共に走り始めた、おそらくは最後となるであろう旅路。

ウ ゆうれいになつてはしまつたが、愛らしい姿で目の前に現れてくれた母を道連れにすることで、幼いころに死に別れてしまつた母との間に残っているこだわりを捨てていこうとする、人生の最後を飾るバイクの長旅。

エ 体力的な限界を考える年齢となり、幼いころに死に別れた母の故郷に、死ぬ前に一度は行つて、母の供養をしなければならぬという使命感から思ひ立つた、残された人生で最後になりそうなバイク旅行。

オ 恋はしたもの、仕事に夢中になつてしまつたあまり、結婚や子供には恵まれなかつたこれまでの人生に心残りを感じ、新しい出会いを探して再び恋をしたいという気持ちからはじめた、人生最後のバイクの旅。

問八 線部に「私のなかで、ぞつとうれしさが走つた」とありますが、この時のイコの心情について、文章全体を踏まえて説明した次の文の a b c d の中にあてはまる言葉を答えなさい。

a の元であるはずの自分に対して、ふーちゃんが b ことをどこか期待していたので、ふーちゃんの姿に c 気持ちを抱いていたが、別れを告げると、 d ので、無性にうれしくなっている。

四、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

かつての日本には、人間をだます多くの動物がいたが、そのなかのオオサキだけは少し様子が異なっている。まず第一に、オオサキは実在する動物なのかどうかがあやしい。私は一九八〇年頃に、ある村にオオサキを捕えた人がいて、みたことがあるのだけれど、それは大型のイタチのような動物だった。本人は間違いなくオオサキだと言うが、①さてどんなものだろう。

オオサキは家Ⅱ家屋につく、といわれている。家にしのび込んで住みつく、と考えてもらえばよい。ただし姿は人間からはみえない。だから住み込まれたかどうかもわからない。

食事のときに、食器をたたいたりしてマナーの悪いことをすると、住みついているオオサキが食事をかぎつけて出てくる。もちろん姿はみえないから、人間は気づかない。そして食べ物を食べていつてしまうのである。後にはミを食べたあとの②カウだけが残っている。人間は知らずにそれを食べる。しかしそこにあるのはカウだけだから、③滋養にはならない。

オオサキがよくとる行動のひとつはこういうものである。子どもたちはよく「そういうお行儀の悪いことをするとオオサキが来るよ」としかられた。

ところで、一応述べておけば、日本の伝統的な考え方では、食事をとるとはミをとることであつた。ミとは魂と書いてもよいし、霊と書いてもよい。つまり、生命の根本的なものをいただく、ということである。それに対して、ミを入れている容器がカウである。食べ物としてみえているものはカウで、ミをいただくために、カウも一緒に食べる。③日本の伝統的な食事のマナーは、静かに、厳粛に食べることを基本にしている。ヨーロッパのように楽しく食べるのではない。それは食事とはミをいただくことで、いわば生き物の生命をいただくから、その生命が自分の生命になると考えられていて、その意味では食事とは他の生命を摂取することなのである。

だから、自分のために犠牲になる生命への感謝が必要になる。日本では、神が人に与えた糧ではなく、^{*}1生命的世界、霊的世界からいただく糧であり、したがって食事のときの祈りの対象は神ではなく、霊的世界になる。あるいは^{*}2絶対神ではなく、霊的世界を形成する神々である。この精神を基底において、日本では食事の作法が生まれた。もったいなくもありがたいこと、という気持ちを表わそうとすれば、そこには厳粛な空気が流れる。

近代化とともに食事で摂るものが生命から栄養に変わり、人間は他の生命からミをいただきながら生きていくという感覚がなくなったとき、伝統的な食事の作法も崩壊した。オオサキは、このような霊的

世界のあり様を教える、おそろく架空の生き物である。

それが一面とすれば、オオサキにはもうひとつの特徴的行動がある。オオサキは秤が好きなのである。人間が秤を出してくると、オオサキはそれに気づき秤に乗る性格をもっている。もちろん秤に乗られても人間にはみえない。

かつての村には仲買業者がよくいろいろなものを買いに来た。養蚕地帯の生糸はその代表的なものであるが、薬草などもその対象になるときがあった。仲買は天秤を出して重さを計測する。天秤とは五十センチくらいの棒の一端に荷を載せる皿が下がり、もう一端に錘りを下げる。秤の登場に気づいたオオサキは、この天秤に乗る。そのとき、荷のほうに乗るくせがつくといつも荷のほうに乗り、逆に錘りのほうに乗るようになると、いつも錘りのほうに乗る。その結果、荷のほうに乗るようになった家では、少し軽い荷でよくなるから余分に収入があり、逆になった家では、少し余分に荷を積まなければならぬ。それが長くつづくと、いままでどおり働き暮らしているのに、^④一方の家は少しずつ金持ちになつていき、逆の家は少しずつ貧乏になつてしまふ。

かつてはオオサキ祓いの儀式がよくおこなわれた。祓いをするのは、当然のことながら、少しずつ貧乏になつていった家のほうである。村の人たちが集まり、オオサキに家から出て行ってもらふ儀式である。^⑤それは真剣なもので、けつして冗談半分で語れるものではなかった。

しかし、この話もうまくできすぎているような気がする。村は、同じメンバーで暮らすことを基本にしている。生まれてから死ぬまで、そればかりか死後の暮らしをもふくめて、同じメンバーとともに暮らす。もちろんこの過程では、村から出ていく人もいたり、入ってくる人もいるのだけれど、考え方としては、同じメンバーとともに暮らしていく社会が村である。ところがその村で、隣の家は少しずつ金持ちになっていくのに、自分は少しずつ貧乏になっていく。隣が新しい試みに成功したり、自分の家が無様に失敗したりしたのなら諒解できるが、同じことをして少しずつ差が開いていくのはやはり面白くない。そこからギクシャクしたものが生まれてくると、村そのものも雰囲気が悪くなる。

こういうときに、犯人としてオオサキが登場するのである。^⑥実にたくみな役割を担った動物である。ただしオオサキ祓いが真剣なものだったという事実は、私たちの世界は目にはみえない生命や霊的なものの介入をたえず受けながら展開している、という^⑦伝統的な人々の考え方を垣間見させる。

(内山節『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』による)

※問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた。

(注) *1 生命的世界、霊的世界……古来、日本では、すべての事物に魂が宿っていると考えられ

ており、その魂の世界のことを、ここでは生命的世界、靈的世界と呼んでいる。

*2 絶対神……ユダヤ教、キリスト教などの、唯一絶対ゆいいつとされている神のこと。

問一——線部①に「さてどんなものだろう」とありますが、筆者はこの言葉をどういう意図で使っているのですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア オオサキがどんな姿形をしているか、見たことのない読者に推測させようとしている。

イ
オオサキを捕つかまえたという人の主張が信頼しんらいに足るものか疑わしいとほのめかしている。

ウイタチを見たことはあるがオオサキは見たことがないので、不安だと言おうとしている。

工人をだます動物の中でもオオサキは特別だということを、例を挙げて説明しようとしている。

オ イタチを捕まえてオオサキだなどと主張する人に対して、強い怒りをあらわにしている。

問二——線部②に「カウだけが残っている」とありますが、これはどういう状態ですか。四十字以内で説明しなさい。

問三——線部③に「日本の伝統的な食事のマナーは、静かに、厳肅げんしゆくに食することを基本にしている」とありますが、どうしてですか。五十文字以内で説明しなさい。

A blank coordinate grid for plotting a graph. The grid is 10 units wide and 10 units high. The x-axis is labeled with 40 and 20. The y-axis is labeled with 50.

問四 ——— 線部④に「一方の家は少しずつ金持ちになっていき、逆の家は少しずつ貧乏ひんぼうになってしま
う」とありますが、どうしてこのようになるのですか。その説明として最もふさわしいものを、次
のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ウ　オオサキをいつも秤はかりの荷の皿に乗るように仕込しこんでおけば、仲買業者の目をごまかすことも簡単になり、同じ錘りと釣り合わせるのに少ししか荷を載のせずにすみますことができるから。

才 靈れいてき的世界への思いが厚く、才オサキ祓はらいを熱心におこなうような家の時には錘りの方に乗り、それほど真剣ざんけんには儀式ぎしきに取り組まないような家の時には荷の方に乗るから。

問五 —— 線部⑤に「それは真剣なもので、けっして冗談半分で語れるものではなかった」とあり

ますが、どうして村の人たちは真剣に儀式をおこなったのですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 世界は必ずしも、目に見えるものだけで形作られているのではないと信じていたから。

イ 貧乏な生活から抜け出して裕福になりたいという思いが、非常に強いものだったから。

ウ 村が裕福になるかどうかは、オオサキが家から出て行くかどうかにかかっていたから。

エ 真剣に取り組まないと、村という社会の中で生きていけなくなるとおそれていたから。

オ 儀式の中でふざけると、霊的存在であるオオサキが天罰を下すと考えられていたから。

問六 —— 線部⑥に「実にたくみな役割を担った動物である」とありますが、ここでオオサキが担っ

ている役割はどういうものですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 村の雰囲気が悪くなってしまった時に、その原因であるオオサキを村人が集まって祓うことで、村人の心を一つにまとめ、もとのなごやかな雰囲気を取り戻すという役割。

イ 同じメンバーで一緒に生きていかねばならない村という社会において、村人の間に生じてしまった貧富の差をオオサキのせいにする事で、村の雰囲気が悪くなるのを防ぐという役割。

ウ オオサキ祓いの儀式を執りおこない、すべての災いのもとを背負わせたオオサキに家から出て行ってもらうことで、その家に何か幸運な出来事をもたらしてくれるという役割。

エ 同じメンバーで同じ仕事をしているのに、いつの間にか差がつき、雰囲気が悪くなってしまいうという現実を、オオサキ祓いをすることで一時の間忘れさせてくれるという役割。

オ 村という社会の中で生活が成り立たなくなってしまうって村から出て行こうとする人を、オオサキ祓いを通して村人皆で助けることで、思いとどまらせることができるという役割。

問七——線部⑦に「伝統的な人々の考え方」とありますが、このような考え方は何によって失われていったのですか。本文中の五字以内の言葉をぬき出して答えなさい。

第一回 入学試験 解答用紙 国語

【注意】 解答はすべてこの解答用紙に記入すること。

得点合計

得点合計

1

①	
②	
③	
④	
⑤	

11.

①	
②	
③	
④	
⑤	

三、

A
B
C
D
E

問

[illegible]

問三

1

問四

11

問五

10

問六

7

問七

7

問
八

c	a
d	b

四、問一

10

問
二

40
20

問三

問四

7

問五

11

問六

7

問七

[illegible]

--	--

--	--